

Title	私の中に生きている臨床老年行動学講座での日々
Author(s)	塩崎, 麻里子
Citation	生老病死の行動科学. 2019, 23, p. 23-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73616
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

私の中に生きている臨床老年行動学講座での日々

The days I spent in RINRO are essential elements that make up who I am

(近畿大学総合社会学部) 塩崎 麻里子

(Kindai University, Faculty of Applied Sociology) Mariko Shiozaki

はじめに

臨床老年行動学講座開設 25 周年、おめでとうございます。私が、当時の教授でいらした柏木哲夫先生の前で学びたいと臨床老年行動学講座の門を叩いたのは、2001 年の春でした。大学院重点化の流れもあり、講座の同期が 7 名で、20 代前半から 40 代までという個性豊かな学年でした。25 周年という節目に当たり、私の目から見た当時の研究室の様子や、そこでの時間が今の私にどのようなつながっているか振り返らせていただきます。

研究室在籍当時の様子

修士課程の頃は、将来への漠然とした不安を強く感じ、努力する方向が正しいかどうかかわからないけれど、とりあえずがむしゃらに学ぶことを学んだ 2 年間でした。建設的で批判的な思考をすること、論理的に説明すること、わかりやすい文章を書くこと...その全てが甘く半人前だったことを痛感し、トイレで自分に対する悔し泣きをした時期もありました。そんな時に逃げずに向き合えたのは、研究室の仲間が支えてくれ、一緒に頑張っていたからです。特に、柏木先生の指導方針は、「就職の面倒は見れません。自分でやりたいことをやって、自分で仕事を見つけてきてくれる人だけ来てください」というスタンスだったので、当時のメンバーは、いつも「自分は何かでき、どのような強みを持っているのか」「自分はどこで生きていくのか」を探っている良きライバルでしたし、リスクがあって選んだ道であれば「自分がやりたいこと」を時間と労力と想いをかけて、突き詰めてやろうというガッツに溢れていました。

私の卒業論文のタイトルは、「癌患者の家族が抱える負担感にストレスコーピングが及ぼす影響（早稲田大学；指導教員坂野雄二先生）」であり、修士

論文のタイトルは「がん患者と配偶者の双方向的サポートー配偶者によって認知されたサポートに焦点を当ててー」でした。この頃は、患者さんにとって、他の誰にも代えがたい家族のサポート力をエンパワーメントすることを目的とした研究に取り組んでいました。学びを深めていくにつれ、がん患者さんの家族もまた、愛する家族のために何かしてあげたくても、何ができるかわからなくて、空回りしてしまったり、無力感に苛まれたりするのを知りました。そこで、患者さんだけでなく家族の苦悩も含めて考え、打開策を提案していけるような研究をしていきたいと考えるようになり、まだまだ学び足りない気持ちを押しさえられずに進学しました。

博士課程へ進学してからは、「がん患者と家族の関係性」に興味をもつ研究室の後輩たちと一緒に研究を進めるようになりました。この出会いは今でも必然であったと思えるような、私の人生にとってかけがえのないものになりました。2003 年度卒業の杉村睦史くんから始まり、2004 年度卒業の吉本けいさん、同じく 2004 年度修了の大橋陽さん、2005 年度卒業の奥中美帆さんたちと、チームで共に悩みながら、学び支え合い、そして共に過ごした経験は、今の私の研究者として、教育者としての核を支えています。私が博士論文「がん患者と家族の心理的適応におけるソーシャルサポートの役割ーがん患者と配偶者の二者関係を中心とした多角的検討ー」を自分の納得のいく形で取り組み、総代をいただいて修了できたもの、彼らとの時間がなくてはなかったものです。

当時の先生方の印象深いお言葉

ここまで研究室でどのように過ごしてきたかを綴ってきましたが、これらの時間に先生方が大きな影響を及ぼしていたことは言うまでもありません。初代教授

であった柏木先生の「皆さんは私の背中をみて勝手に育ってくれたので、教え子だとは思っていないのですが、みんなが私の教え子だと言うので、きっとそうなのでしょう」と飛び切りの笑顔でおっしゃる姿に、何かひとつも柏木先生から学びたいと常に必死だったことを思い出します。その時の准教授でいらした恒藤暁先生がおっしゃっていた「意識が変われば、行動が変わり、習慣が変わり、人格が変わり、最期に運命が変わる」というお言葉は、私の院生生活初期にとっても印象に残り、大きな影響力がありました。そして、二代目教授であられた藤田綾子先生から頂いた「無理しないで、もっと自分らしくやってみれば？」というお言葉で、背伸びをせずに、今の自分ができるベストで挑戦しようと思えました。卒業してからも、折に触れて先生から頂く優しいお言葉や激励は、女性として大学で生きていく上での道しるべとなっています。そして、最も院生たちにとって身近で、それでいて時に強烈なインパクトをもって導いてくださったのが平井啓先生でした。サイコオンコロジーの分野で心理学の研究実践を中心に生きていく道を開拓し、研究者として独創的に学び続けることや、時代が何を求めているのかを敏感に察知し戦略を立てることの大切さを根気強く教えてくださいました。「何の専門家として生きていくか覚悟が必要」とのお言葉、今も自分に問い続けています。先生が研究室での楽しいイベントを計画してくださり、皆で沢山の思い出を共有することができました。当時も先生方に感謝していましたが、卒業してひとり立ちしていく中で、いかに研究室で学んだことが大きいかを実感し、何度感謝したかわかりません。

大阪大学医学系研究科公衆衛生学教室ポストク時代

2006年からは学術振興会特別研究員PDの立場で、大阪大学医学系研究科公衆衛生学教室の磯博康教授の元で学びました。心理学の視点とは全く異なった疫学的視点を学べたこと、ビッグデータが描き出す世界的水準での数値上の因果関係の世界に、生きた彩りを加えるのが、何気ない人々の生活を泥臭く丁寧に追いつけることであること等、様々な職種の方々が集まり、熱い想いでつないでいく研究を研究室の内側から経験させて頂き、多くを学びました。

現職である近畿大学へ

近畿大学へは、2009年春に異動し、次年度開設の総合社会学部の立ち上げから関わらせていただきました。そして、初年度から、“いのちの尊厳”という重いテーマの講義を担当しました。さて何を語ろうかと授業の準備をしていて、改めて驚き感謝したのが、臨老で出会った全ての方々との濃密な時間が、私に沢山の知識を与え、自分で意識している以上に私を変えて、育んでくれていたことです。また、初めて自分の研究室を持ち、様々な意思をもつ学生をどう指導すべきか悩んだ時にも、大学院時代に同じ志を持ち、研究を通して関係を築いていけた経験が勇気をくれました。

現在私は、在外研究の機会をいただきアメリカのStanford Center on Longevityでお世話になっています。高齢者にとって人生の締めくくりを決定づける重大な意思決定において後悔をすることはとても辛いことです。後悔のない意思決定を実現するために、私たちは何ができるのか？避けられなかった後悔を、受け入れていくにはどうしたら良いのか？自分らしい人生の締めくくり方には、時代や国を超えた普遍的な側面と、文化社会的背景を色濃く反映した特殊な側面があります。日本とは全く文化の異なるアメリカにおける高齢者の実態を知ることは、日本の特徴を浮きあがらせてくれます。生老病死は、自分が歳を重ねるごとに見え方が変わります。形は変わりましたが、院生時代に負けず劣らず、臨床死生学に魅了され続け、研究に取り組んでいます。

おわりに

私は今なお、ここにお名前を挙げきれなかった多くのOB・OGに、折に触れて、助けて頂いています。佐藤眞一教授、准権藤恭之教授、豊島彩助教にも、様々な機会に声をかけて頂き、支えてくださっていることに感謝しかありません。そして、今回の紀要への寄稿を機に、臨老での時間を振り返ったことも、また、これらの私の人生を支えてくれることでしょう。

最後になりましたが、この場を借りて、藤田綾子先生と吉本けいさんのご冥福を心からお祈り申し上げます。2人に恥じないように一生懸命に生きていこうという決意で、これを締めくくらせていただきます。